

オプション教材リンゴ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

2.

3.

4.

5.

宿題がどっさりあるとき、ふうとため息をついて、「山のような宿題」とか、「宿題の山」ということがあるでしょう。このとき、あなたはすでにレトリックの世界に入り込んでいるのです。山は文字どおりの山ではありません。比喩的な山だからです。

比喩的な山なので、登ることはできない……と思っていると、宿題がはかどって、どうにか「山を越す」というでしょう。やはりすでに山を登りはじめていたのです。「宿題の山」は、レトリックの用語では隠喩といえます。「山のような宿題」は直喩といえます。このような表現手段をもたない言語は、地上には存在しません。こう断言していいでしょう。人間が手にする表現の手段としてのレトリック、これは基本的には文化を超えて平等なのです。

つまり、隠喩や直喩などの言い回しは、日本語のレトリックのパターンであると同時に、まだあなたのよく知らない諸外国のレトリックのパターンでもあるということです。そして、レトリックが、文学的な表現であると同時に、日常的な表現でもあることを、あらかじめ知っておいてください。

西欧社会では、レトリックは二五〇〇年の歴史をもちます。紀元前からの伝統で、ソクラテス、プラトン、アリストテレスたちが活躍した古代ギリシア時代から続くものです。ふつうレトリックというとき、この西洋のレトリックを指します。

では、レトリックとは何を意味し、何を目的としたのでしょうか。当時のギリシアは、市民に言論の自由がありました。そして、市民の代表は、自由に意見を述べることができて、議場での議論とその結果によって重要な方針が決められました。そこでは、いかに「よく話す」かが当然大きな意味をもつでしょう。

レトリックは、議場や裁判の場で、「よく話す」方法として開発され、それがしだいに体系化されていったものです。「よく話す」の「よく」とは、「説得力をもつて」という意味です。つまり、レトリックとは、「説得術」を意味したのです。腕力で人を負かすのではなく、ことばで人を説き伏せる——、これがレトリックでした。きわめて実践的な意味をもっていました。

(中略)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

説得術としてのレトリックは、より広くは、「弁論術」と理解されました。人前で話すときは、いつでも相手を説得することを目的としているとはかぎらないからです。たとえば、英雄の死に対して弔いのことばを述べるのも、弁論の大切な一部でした。自由な発言が認められた社会では、なにかにつけて口頭による論、つまり弁論が重視されました。この弁論術の主軸が、説得術だったと考えていいでしょう。

レトリックは、古代の哲学者のアリストテレスが書いているように、どのようなテーマに対しても応用できる一般的な技術体系でした。ですから、私利私欲のために悪用する者もいました。たしかにレトリックならぬトリックとして用いる者もいました。また、近年にいたっても、国民を大規模な戦争に向かわせる政治レトリックにも応用されました。この意味で、レトリックは両刃の剣です。説得力が悪い方向に暴走しないように、知性による見張りが必要なのです。

(瀬戸賢一「日本語のレトリック」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

花の多いところに着いたら、リュックを下ろして寝ころんでみよう。寝ころぶ場所が問題で、谷あいの棚田なら山手半分は敬遠したほうがよい。いつの間にか滲み出した水のために背中がぬれる。地下水位が高いのだ。下手の畦のへりなら乾いていて、まず大丈夫だろう。そのつもりで改めて眺めなおすと一枚の田んぼでも場所によってレンゲの生え方、密集の程度がちがう。レンゲはあまり湿った土を好まない草である。ブンブン唸り声が聞こえる。ミツバチだ。チョウも遊びに来るかもしれない。ミツバチの仕草を眺めたら、レンゲの体を見なおしてみよう。

まずレンゲを一株だけ、根ごと掘りとってみる。カマかせに抜くのではなく、棒切れか竹べらか、あるいはナイフを土に突き立てて、なるべくそつと掘り上げる。指でつまんで土を丁寧にもみほぐすようにして落とすと、根があらわれる。付近の用水溝の水で洗ってみると、いっそう根の様子がよくわかる。一本の太い根と、枝分かれしたたくさんさんの白っぽい根がある。そのヒゲ根のあちこちに、米粒形の長さ三〜五ミリほどの粒がたくさんくっついていいるだろう。少し赤みがかっている。

この粒が曲者だ。これはじつはチツソ工場なのである。この中に根瘤バクテリアという特別な細菌が住んでいて、根のまわりやすき間などの空気の中のチツソを水溶性のチツソ化合物に変える働きをしている。稲刈りをした後の田んぼにレンゲの種子をまいておくと、翌年の田植えまでの間にレンゲが生え、根に粒ができて多くの水溶性のチツソ化合物が生産され、レンゲはこれを栄養にしますます生長する。これをスキで掘り起こし、くだし、土と混ぜる。つまり肥料にするわけで、緑の草の肥料という意味で「緑肥」と呼ぶ。現金収入の乏しかった農家が、化学肥料を買わずとも田んぼの土を富ませられる手段だったわけである。

この方法は昭和十年代が最盛で、二十年代には半分に減った。最近では人手不足の代わりに現金収入のふえた農家が、手間の簡単な

「金肥」——化学肥料をどしどし使うので、田園全域が赤い花に敷きつめられるという風景は少なくなった。レンゲはもともと日本には生えていなかった、と考えられる。中国大陸の原産で漢名を紫雲英または翹揺と言いい、「緑肥」として栽培がさかんに行われ出したのは明治中葉と言われている。

レンゲの花が終わり、野を占めるものの主役が虫媒花からイネ科の風媒花に変わるころ、田園の風景はにわかに色どりを失う。(中略) だから、春の野の花の鮮やかさは、農民たちには一種の救いであり、よみがえり来る生の季節の象徴として喜ばれたのだろう。キンセンカ、ヤグルマギクに始まって、種子とりには必要なほど多量のシュンギクの花が、抜きとられもせずに咲くにまかせてある。不精なのではない。単なる風流でもないように思われる。少しでも風景を色どりに豊かにしようと心がけてきた農民魂のあらわれなのである。

かつて大和の飛鳥ではレンゲ論争というのがあった。村長さんが音頭をとって、農家にレンゲの種子を配り、休閑田にまこうと奨励した。観光客の誘致のためである。「日本のふるさと」というキャッチ・フレーズのポスターには、ぜひとも野にみちるレンゲの赤が必要だ。レンゲにうずまる田園こそ、訪れた都会人たちの心をなごませ、楽しかった少年時代への郷愁を呼ぶ——。植物学者のKさんがこれに抗議した。もともと日本にレンゲはなかった。古代の飛鳥の風景はもつと淡彩素朴であった。飛鳥が「日本のふるさと」ならば、そうした「ふるさと」の真実を訪問者に知らせることが大切なのだ。レンゲまきをすすめるなど邪道だ——。

春に咲く野の花は、黄色の花が多い。量の多いタンポポやジシバリ類、キンポウゲ類、ヘビイチゴ類がすべて黄色で、白い花はハコベにしてもタネツケバナにしても小形で目立たない。これでレンゲがなかったのだから、古代日本の田園の風景は、もつと地味で寂しい眺めだったにちがいない。そのような風景を眺めて、私たちの祖先は暮らしていたのである。

(日浦勇『自然観察入門』)



私たちの体が膨大な数の細胞からできていることは、みなさんもよくご存じだと思います。ではその細胞はいったいどのくらいの数があるのでしょうか。

体重六〇キロの人で約六十兆個もあります。キロあたり約一兆個の計算で、生まれたばかりの赤ちゃんでも三兆個の細胞をもっています。とにかくちよつとピンとこないくらいにすごい数ですが、もつとすごいことは、この細胞の一個一個に、例外を除いてすべて同じ遺伝子が組み込まれていることです。

人間の体はいろいろな部分で成り立っていて、見た目やはたらきはずいぶん違っています。たとえば髪の毛と爪と皮膚。この三つを見ても、とても同じ仲間とは思えないでしょう。しかし、これらは全部細胞と呼ばれるもので、構造やはたらきは基本的に同じ。そしてその細胞のはたらきを決めている遺伝子もまったく同じなのです。

そこで、細胞の仕組みをここで簡単に説明しましょう。

一つの細胞の中心には核があつて核膜でおおわれており、その核のなかに遺伝子があります。元をたどればこのたつた一個の細胞（受精卵）からスタートして、いまのあなたがたなのです。一個の受精卵が二個に、二個が四個に、四個が八個に、八個が十六個に……と細胞が次々に分裂を繰り返して、途中からは、

「おまえは手になれ」
「おまえは足になれ」

「俺は脳にいく」
「俺は肝臓になる」

と、それぞれ手分けして母親の体内でどんどん分裂を続けて、十月十日で出産、細胞数約三兆個の赤ちゃんの姿になってこの世に誕生する、というわけです。

もちろん、その後も細胞はどんどん分裂を続けますが、問題は遺伝子です。

遺伝子は細胞の核のなかにあり、ここにDNA（デオキシリボ核酸）という物質があるのですが、この物質こそ私たちが遺伝子と

呼ぶものなのです。

その構造については第一章で詳しく説明しますが、ここで簡単にいつておきますと、DNAはらせん状の二本のテープになつていて、そのテープ上に四つの化学の文字で表わされる情報が書かれています。この情報が遺伝情報で、そこには生命に関するすべての情報が入っていると考えられています。

ヒトの細胞一個の核に含まれる遺伝子の基本情報量は三十億の化学の文字で書かれており、これをもし本にすると、千ペーじの本で千冊分になる。そして私たちはこのDNAに書き込まれた膨大な情報によつて生きています。

これだけの膨大な情報量をもつた遺伝子が、六十兆個の細胞の一つ一つにまったく同じ情報として組み込まれているということは、体のどこの細胞の一片をとつてきても、そこから人間一人を立派に誕生させることができる可能性をもっているということです。

しかし、ここで一つ大きな疑問が生じてきます。どの細胞も人間一人の生命活動に必要な全情報をもっているとしたら、爪の細胞は爪にしかならず、髪の毛の細胞は髪の毛の役割しか果たしてはいないのはどうしてなのか、ということなのです。

髪の毛の細胞が急に「心臓の仕事をしたい」、心臓の細胞が「俺は今日から爪の仕事をする」などといった出すことはないのか。各細胞がもつ情報はすべて同じなのですから、それは潜在能力的には可能なのとのです。

しかし現実にはそういうことは起きていません。それは爪の細胞の遺伝子は爪になることはOK、つまり遺伝子をオン（ON）にしているが、それ以外はいっさいダメ、つまりオフ（OFF）にしていると考えられるからです。詳しいことはまだよくわからない部分もあるのですが、受精卵から分裂して体をつくっていく過程で、細胞間でなんらかのそういった取り決め、役割分担みたいなものが行なわれ、以後は各細胞がそれをきちんと守っていると考えられています。

（村上和雄『生命の暗号』）



むかしぼくらは、学生で合宿していたころ、よく上野の動物園へ出かけていった。近かつたし、ほかに遊びを持ってなかつたし、二、三枚の銀貨でみんなそろって遊べるので、よくいっしょにドヤドヤツと出かけていった。

しかしぼくは、全体としての動物園をあまりすかなかつた。第一、水禽すいきんのガアガアなきたてる声あまり愉快ゆかいでなかつた。第二、広い動物園にいっぱいになってるケモノのおいがたまらなかつた。それがひどくからだを疲れさせた。らくだなどことにひどかつた。ぼくがみんなといっしょによく出かけたのは主として山猫やまねこを見ようためだった。

山猫やまねこめは全身まっ黒の毛に包まれて金いろの目をしていた。かれのしっぽはからだよりも長く、イザというときにはこん棒のようになるにちがいない一種特別のふくらみを見せていた。ぼくの知るかぎりかれは、おりの奥行きおくゆきの半分より前へは一度も出てこなかつた。いつも奥の方にすわって、けつして人になれることがなかつた。ぼくはかれに「ごろつき」の名を与えた。かれはぼくに、ごろつき、ニヒリスト、かつばらい、海賊等かいぞくのことばを思い出させた。

熊くまはおりの金棒につかまって臆面おくめんもなく芸当をして見せていた。虎とらは金いろのしま目をきらめかしておりのなかを行き来していた。それは落ちぶれた貴族のようにものあわれであつたが、同時に落ちぶれた貴族のように浅ましい媚こびを感じさせた。獅子ししときては話にもならなかつた。かれはすっかり食い肥ふとつて、むかしのこともすっかり忘れはててしまい、ここでもいつかかれをつかまえた人間どもから比較ひかく的てきによく待遇たいぐうされてることにいい気になってしまい、その「あてがいぶち」に満足しきつていた。鈍感どんかんになつてしまったかれは、この動物園のなかでさえ自分を王様と考へてるように見えた。それは豚ぶたにも劣おとるものだった。

しかし山猫やまねこめにそんなことはなかつた。かれはまっ黒の顔をしてその金いろの目をピカピカ光らせていた。おりの暗い奥おくの方でそれは燐りんのように燃えていた。かれはけつして人前で歩いて見せたりはしなかつた。こんなところへ押おし込こめ

になつていてもいつもかれの国のことを考へていた。かるがると飛び、飛び越こし、全力でかみ、思う存分血を流すかれの国でそれができないくらいなら、そんなところでたとえそれをするこから肉の一片ひときれを手に入れることができるとしても、そんなことのまねをする必要はないと考へていた。虎とらや獅子ししや大蛇だいじやなぞがこんなばかものになつてしまったとすれば、やつらがそんなに墮落だらくしてしまつたというその一事のためにもがんばらなければならぬと考へていた。かれは本能的に捨て身にかかつていた。それでかれのおりは一種のうすつ氣味悪さで見人おそに襲おそいかかつた。それで人びとはかれのおりの前まへにあまり長く立ちどまらず、なるべく黙殺もくさつする方針をとり、果ては知らず識らず黙殺もくさつして、とうとうそのことに平氣になつてしまつていた。

(中野重治『山猫その他』)



——こうして話しているうちに、今日、昭和十六年五月二十九日の太陽は、大阪の西の空に沈んでしまいました。やがて気の早い星が姿を……。

プラネタリウムの解説者の声が、ぼわんとくらんだ感じで天象館のドームにひろがって続いていた。すると、洋のすぐ横のあたりで、

——いやあ、ほんまやわあ。

澄んでよくとおる声があがって、細い腕がついとび、一番星をちゃんと指さしていた。

目の早い子やなあ……。洋は思わず声のしたほうをふりむいて見たが、むろん、顔が見えるわけがなかった。天象館のなかは、もうすっかり夜の色だったのである。ついさっきまでは夕映えのなかに立つ奇妙なロボットに見えたプラネタリウムでさえ、闇のなかにとけていた。(中略)

さて……と、解説者が次にうつったとき、洋は横の洋次郎に小声で話しかけていた。

——にいやん、ほんまにようできとるなあ、このプラネタリウムたらいう機械。

——そらあたりまえや。なんせ、ドイツのツアイス製やさかいなあ。

洋次郎は、まるで自分がカール・ツアイス社の社員であるみたいに、いばった様子で答え、

——ま、黙って、よお見とくんやなあ。と、先輩ぶった。

洋次郎は洋と三つちがいの中学一年生。ここへはもう何度かきていたが、洋はその日が初めてだった。

だから洋には、この何もかもがめずらしかった。電気館の小さな実験装置のボタンも、いろんな模型を動かすボタンも、わけのわからぬまま、とにかくかたつぱしから押してやった。洋次郎はそんな弟のことを、はじめはあきれ顔で見ていたが、すぐにだんだん気難しい顔になって、そないにみんなさわつとつたら、プラネタリウム見る時間なのなるやないか……と、せきたてた。そないいうたかて、こっちは初めてやもん、しゃあないがな……と、洋は口をとがらせたが、おこりんぼのにいやんのげんこつがこわくて、ほどほどにしてしまった。

けれど、初めて見たプラネタリウムは、そんな洋の不満足な気持ち

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

ちを吹き飛ばすのに充分だった。この、鉄垂鈴のおばけみたいな機械のことは、くる前から何度か聞かされていた。それにお前、そいつがまた日本に一台しかないのんが、この大阪にあるちゅうわけや、うれしいやないか……と、洋次郎は大阪市長の代理みたいなようすでいったが、ほんとに百聞は一見ニシカズ、だった。

しかも、それがまた、これほどうまく「夜」をつくりだすのに、洋はうっとりとして見とれてしまった。

するとまたそのとき、さっきの女の子の音が、小さく、けれど洋の耳にはつきりと聞こえるくらいにこわい。

——おかあちゃん、うち、眠とうなつてきてしもた。オヤスミ……。

それから、ああんちつちやなあくびの音がして、おかあさんらしい声がもしもしよと小言をいうのが聞こえた。

きつとまだ小さな子なので、ほんものの夜とかんちがいしてしもたんやろ、解説がむずかしすぎたんやろ……と、洋は見知らぬ女の子に同情し、くすんとひとり笑いしてから、再び解説者の声に耳をかたむけた。

北斗七星の話にあんまり驚いたので、洋の耳にはあとの解説の音がはいらなかつた。気がつくど、いつかドームの空の星はぐんとへつていて、東の空がほんものの夜明けの紅いろに染まりはじめていた。

——それではこのあたりでおしやべりはおしまいにして心静かに五月三十日の朝を迎えることにいたしましよう。

解説のしつぽだけが、ようやく洋の耳にとどいた。声にかわつて、優しい音楽が流れ、星はみるみるうちに姿を消し、太陽が顔をのぞかせた。なんやほんまに一晚すぎてしもた気がするなあ、と洋はまだ立ちあがれずにいた。すっかり明るくなったとき、館内のシートの三分の二くらいを埋めていた見物客たちは、もう半分以上、出口から消えていたし、洋次郎ももう、二、三歩歩きだして、ぐずぐずしている洋を見ながら、ほんとの朝のようにあくびをした。そこで急に、さっきのあくびの主のことを思いだして、洋は立ちながらふりかえつた。シートには、母娘のかわりに、かわいい麦わら帽子がふわんとすわっていた。

——あの子、忘れていきよつたな。

洋は声をあげた。(今江祥智『ぼんぼん』)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

（「私」は、複雑な家庭に育った十五歳の少年。ボールを両親から引き取っています。）

「どうして多くのことを放っておいてくれないんだ？」

私はまた彼の横に腰を下ろした。「なぜなら、おまえさんが生まれた時からみんなが放ったらかしておいて、そのために今、おまえは最低の状態にあるからだ。おれはおまえをそのような状態から脱出させるつもりでいるんだ。」

「どういう意味？」

「おまえが関心を抱く事柄が一つもない、という意味だ。誇りを抱けることがまったくない。知りたいと思うことがない。おまえになにかを教えたり見せたりすることに時間をさいた人間が一人もいないし、自分を育ててくれた人々には、おまえが真似たいような点が一つもないのを見ているからだ。」

「なにも、ぼくが悪いんじゃないよ」

「そう、まだ今のところは。しかし、なにもしないで人から見放された状態に落ち込んで行ったら、それはおまえが悪いんだ。おまえはもう一人の人間になりはじめる年齢に達している。それに、自分の人生に対してなんらかの責任をとりはじめるべき年齢になっている。だから、おれは手をかすつもりでいるのだ」

「それとウェイト・リフティングとどんな関係があるの？」

「得意なものがなんであるか、ということより、なにか得意なものがあることの方が重要なんだ。おまえにはなにもない。なににも関心がない。だからおれは、おまえの体を鍛える、丈夫な体にする、十マイル走れるようにするし、自分の体重以上の重量が挙げられるようにする、ボクシングを教え込む。小屋を造ること、料理をすること、力

いっばい働くこと、苦しみに耐えて力をふりしぼる意志と自分の感情をコントロールすることを教える。そのうちに、できれば、読書、美術鑑賞も教えられるかもしれない。しかし、今は体をきたえる、いちばん始めやすいことだから。」

「それでどうなるの？」ボールが言った。「ぼくは、もう少したつたら、また帰るんだ。結局なんにもならないじゃないか？」

私はボールを見た。青白くやせこけて鳥のように縮こまっており、背を丸めてうなだれている。髪が伸び放題だ。指にささくれが

できている。「なんというかわいげのない小僧だろう」
「たぶん、そういうことになるだろう。だからこそ、おまえは帰るまでに自立できる能力を身につけなければならないのだ。」

「えっ？」

「自立心だ。自分自身を頼りにする気持ちだ。自分以外の物事に必要以上に影響されないことだ。おまえはまだそれだけの年になっていない。おまえのような子供に自主独立を説くのは早すぎる。しかし、おまえにはそれ以外に救いはないのだ。両親は頼りにならない。両親がなにかやるとすれば、おまえを傷つけることくらいなものだ。おまえは両親に頼ることはできない。おまえが今のようなになったのは、彼らのせいだ。両親が人間的に向上することはありえない。おまえが自分を向上させるしかないのだ。」

ボールの両肩が震えはじめた。

「それ以外に道はないんだよ」
泣いていた。

「おれたち二人でやれる。おまえはある程度の誇りを抱き、自分自身について氣にしている点がいくつかできる。おれは手助けができる。二人でやりとげることができる」

背を丸めうなだれて泣いており、骨がごつごつしている肩の汗が乾きかけていた。私はほかになんにも言うことがないまま、彼とならんで坐っていた。彼の体に触れなかった。「泣くのはかまわないよ。おれも時折泣くことがある」

（R・B・パーカー作・菊池光沢『初秋』）



私は一人で薪を燃やしていた。太い山毛櫨の薪で、燃えつけば容易なことでは消えないかわりに、どんどん燃えさかることもない。背中が冷えてくるし、ぽつんとしているのが変に具合も悪くて、もつと炎を明るく、顔が赤くほてって来るようにしたかったのだが、その薪の肌をかき立てれば、火の粉が楽しげに煙突へ吸われて行くばかりで、かえってその後は寒々としてくるのだった。私は遠い他国へ来ている気持ちになって、シベリヤの冬を考えてみたり、カナダの田舎を思ってみたりする。その時私は満十四歳になってわずかしかったていなかっただが、どういう加減か老人の心持ちが分かつてくるようだった。だれからも見離されたのでもなく、ただ自分から一人だけの居場所を見つけて、こうして火をいじりながら冬をすごしている老人が、この地上にはどのくらいいるか知れない。彼らはそれほど疲れているわけではないが、その一種の宿命的な、自ら選ばざるを得なくなった悲しみをこらえながら、なかばそれに慣れた顔付きで、燃える火を見つめている。彼らが何を考えているか、それが私には分かるような気がする。

私の山への思慕は、こうしたある年の大晦日から始まる。煙突をうならせているこんな風も初めてだったし、この小屋の二重のガラス窓を打つ雪の音も珍しかった。そしてこれほどの寒さも、これほどの心の冷たさも初めてのことだった。火にすがりついているより仕方がない。それは山の中腹に建てられたかなり立派な小屋だった。外から入れば扉をあけもう一つ扉をあけたところが、私の好んで火の番をしていた土間なのだが、そこから四五段上がったところには、またもう一つ別の扉で寒気から充分に隔離された広間があり、そこはいつも暖炉であたためられていた。みんなこの小屋を利用する人たちは、そのあたたかい広間に集まっていた。大きいテーブルがあり、長椅子もあり、暖炉の前で本を楽しく読むこともできたし、床には上等なじゅうたんも敷いてあったから、火の前にすわり込んでみられたわけだ。けれど私がそこよりも好んだ土間は、ちょうど太い煙突を中心にこの暖炉と背中合わせになっていて、二つ置いてある椅子は木製だった。外から雪だらけになって入って来る人たち

が、そこへしばらく腰をかけて、上衣や足にこびりついたこちこちの雪をとかすためのものだった。だからうっかり腰をかけると、その椅子はぬれていた。ただ私を慰めることもなく、黙って見おろしているのは、その暖炉の上の壁にとりつけてある剥製の馴鹿の首だった。厳しい角だが、鼻面や頸のあたりは、いつも優しく、その角で何かを威嚇しようとしても、気の弱さや、心持ちが華美に生まれついていることをすぐ見破られてしまいそうな、そんな動物に思われた。それは、こうして剥製になって、壁の飾りになってからもよく分かった。窓の外につるして、窓ガラスの曇りを拭き取りさえすれば、そこから見られるようになっていいる寒暖計は、この寒い吹雪の晩に、氷点下五度に下がっていた。私は懐中時計をつけてそれを見た時の、指先の冷たさや、背中の寒さを覚えていたが、その氷点下五度というのは気温ばかりではなくて、自分の心の温度でもあったような気がする。

この心の冷たさをあたためるために、私は再び燃える薪の近くへ椅子を引き寄せてすわったが、それはたいして愚かなことでもなかった。なぜなら、やつとのことで炎を勢いよく出し始めた火が、私をあたたためて眠りに誘い、いつの間にか、馴鹿のひく櫓にのって、山の重なる雪道を走って行く夢を見た。それは私の知っているとこころではなく、どこを見ても一面の雪の、寂しい起伏の続いている山の麓のようなどころではあったが、馴鹿は私をのせた櫓を、自信をもつてひいて行くので、私はどこか知らなくても、あたたかく自分を迎えてくれる一軒の家のあることを疑わなかった。そこには人が住んでいなくて、その馴鹿が優しい人のような生活をしているようにも思われた。

(串田孫一『若き日の山』)



島崎藤村の事を考えると、私の頭に先ず浮かんで来るのは、「夜明け前」の出版祝賀会の席上で、氏が諸家の祝賀の言葉に対して答えた挨拶を述べた態度である。

人々のテーブルスピーチが終わると、藤村は感慨に耽り込んだような、そのために少しぼんやりしたような顔附で静かに立ち上がり、暫くうつむき加減に黙って佇んでいたが、やがて顔をもたげ、太い眉をきりりと上げて、そしてゆっくりとした口調でこういったのである。

「わたしは皆さんがもつとほんとうの事をいつて下さると思つていましたが、どなたもほんとうの事はいつて下さらない……」

そのまま又眼を伏せて暫く黙つてしまった。人々は肅然と静まり返つた。

実際諸家の言葉は月並でない事はなかつたが、由来こういう出版記念会などにいわれる言葉は、普通作者に対する祝賀の言葉かねぎらいの言葉かであるのが例なので、そういうものとして無神経に聴き流してしまえば、別段とがめ立てしななければならないものでもなかつたように思われる。併しそれをほんとうに聴き、その中から自分の努力に対する忌憚なき批評をほんとうに探ろうという氣になれば、諸家の言葉が余りに形式的である、月並なお世辞であつたという事が、藤村の心を寂しくしたとしても、これまた無理ではないかも知れないという氣がする。

それは藤村流の静かない方ではあつたが、何処かにびしりと人を打つような辛いものを含んでいた。月並なお世辞に対する苦笑に充ちた抗議を持つていた。それだから突然叱られたといった感じが黙り込んだ人々の顔に現れたわけである。実際叱られて見れば、もつとも話である。叱られなかつたら叱られなくても好いようなことだけれども、叱られて見るとその理由がない事はないので、急に人々は襟を掻き合わせて坐り直さなければならなくなつたと云つた感じであつた。

藤村は暫く黙つた後で、再び顔をもたげ、太い眉を再びきりりと

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

上げ沈んだ調子で言葉を継いだ。

「大体わたしという人間は、人に窮屈な感じを与えるのですか、近づき難いような感じを与えるのですか、誰もわたしに近づいてほんとうの事を云つてはくれませんか……実は決してそうではなく、わたしは人に近づきたいのですけれど……」(中略)

氏はそこで語調を変えて、人々の方を見まわし、こう結語として

「今夜のように盛大にわたしのために皆さんに集まつて頂くことは、わたしには全く思いがけない事でした。わたしはわたしのために皆さんに集まつて頂いた事がわたしの生涯にもう一度ありました。それはわたしが洋行した時の事です。わたしは前の新橋の停車場から発つて行きましたが、田山君や柳田君が途中で送ってくれるといつて、一緒に汽車に乗り込んで来ました。その時柳田君がわたしに向かつてこんな事をいつたのです。『人間がこうして自分のために沢山の人の人集まつて貰うのは、まあ洋行する時ぐらいのものだね。それともう一つある。それはその人間の葬式の時さ』と。……わたしは今夜皆さんがこうして集まつて下さつた事を、わたしに対する文壇の告別式だと思つています」

右の藤村の挨拶は、その時も今も私の頭に相当強い印象を残している。私はたゆまずに一步一步と、意志的に自分を鞭うちつつ、とうとう書きたいものをみんな書いてしまつたという強い自信を持つた人になければ、そういう言葉はいわれなかつた。書きたいものをみんな書いてしまつたと、静かに云い切れる作家を目の前に見たという事は、私には全く一個の驚異であつた。私はその事に深い感動を受け、暫くはその感動のために、自分が圧迫されるのを感じた程である。

(広津和郎『藤村覚え書き』)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

かつて私は、ある作曲家に、作曲家が自分の名を冠することのできる曲は、時代がくだるにつれて可能性がかぎられてゆき、やがて種切れになるのではないかと、質問したことがある。作曲家の答えは、まだまだ無限といつてよい音やリズムの、組みあわせの可能性がある、ということであつた。

まもなく私は、音楽より絵の方が、種切れになりつつあるのではないかと思うようになった。特に、現代にさかんな公募展こうぼうという発表形式は、画家の自己主張の工夫と、みじめなあせりとの悪循環あくじゆんかんをおっているように、私は思えてならなかった。「制作」と「売り絵」を描き分けている人では、売り絵の方に、その人のもっている良いものが、かえって素直に出ていると思われることがある。

数年前バリで、ジョルジオ・モランディの遺作展をみて深い感銘をうけてから、私はこうした種切れ論など、たいそう浅はかな見方にすぎないことを感じるようになった。このつましい現代イタリアの絵かきは、それまでの何万何十万人の画家が描いてきたものに彼の独創をつけ加えようなどと、決して考えなかつたにちがいない。彼はただ透明な目と心の指示するままに、ものの色とか形とかから、不純なものを取り除いていったのであろう。その精進が、あれほど単純で、ありふれてさえみえる静物画や風景画に、あれほど大きくて深い力をあたえていたのであろう。こうした精進によつて、私たちの前にとりだされた色と形に向かつて、絵画種切れ論など頭を垂れるほかはない。ジャン・フォートリエの作品のような、感性が、そのまま色の濃淡、時として絵の具のわずかなもりあがりになつて流れ出ていると思われ、る絵にすら、私は「創造」よりは「発見」への努力の、謙虚な崇高さを感じずにはいられない。

同じことは、学問についてもいえるかもしれない。真に深い洞察は、先人の業績における独創をつけ加えてやろうとする肩をいからした精神からは決して生まれないようだ。それなら、宇宙の構成要素と、それらをつなぐ原理は、古来一定不変で、ただその組みあわせの変化の多様さや、動きの複雑さが、歴史の進行に新しい創造があるかのような錯覚を、人間に与えてきたといえるであらうか。そのことは、これから先も、おそらく人間に決してわかつていくことがないだろう。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

一番大きいものと、一番小さいものは何かという問いすら、永遠に答えられないことを自分でも承知していて、あいまいに、ある程度の時間だけ生きている人間にとつて、彼が宇宙のなかで明らかにしえた既知の部分など、未知の部分にくらべて微々たるものでしかない。人間にとつて、未知の部分は永遠に残るどころか、人間が既知の領域を骨折つて拡大すればするだけ、それに外接する未知としてじかに感得できる領域も、ますます広がってゆくことはたしかなのだから。

人間の営みを扱う人文・社会科学と自然現象一般を扱う自然科学という、比較的あとの時代になつて人間が問題とするようになった区別も断絶した対立ではなく連続した差異にすぎないことは、サバンナの中で考えていると全く自明のことのように思われてくる。どれほど精密な電子顕微鏡をのぞくのも、人間の目であり、あらゆる計算を可能にする数の体系を、ひとつの約束事として考察したのも人間である一方で、言語を頂点とする意思の伝達や、後天的に得られた知識や技能の同類への伝達は、決してホモ・サピエンスだけのものではない。

人間は、自分たちだけが自然のなかにたまたま見つけたものは、したり顔に「発明」と呼び、他の動物のすることは、どんな精巧でも、あれは本能だという。自然の一部分である人間の自然のなかでの優位の主張は、人間の自然認識がある程度すすんだ段階で、人間が示したいくらか子供らしい拒絶反応であつたように、私には思われる。人間が自然と連続した関係においてとらえられることが、ほかならぬ人間が考察し精密化した手段によつて明らかにするにつれて、逆に人間は主体性とか価値ということに、ますます執着せざるをえなくなつたのであろう。

自由への道は、人間が自然に対して自分勝手に振るまうのではなく、自然と人間の関わりあいについての認識を上げ、明白にする努力のうちに、少しずつ明らかになつてゆくものなのかもしれない。

（川田順造『曠野から』）



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

ある作家の全集を読むのはひじょうにいいことだ。研究でもしよう
 というのでなければ、そんなことは全くむだごとだと思われがちだ
 が、決してそうではない。読書の楽しみの源泉にはいつも「文は人な
 り」ということばがあるのだがこの言葉の深い意味を了解するのに
 は、全集を読むのがいちばんでつとり早い。しかも確実な方法なので
 ある。一流の作家ならだれでもよい。好きな作家でよい。その人の全
 集を、日記や書簡の類に至るまで、隅から隅まで読んでみるのだ。

そうすると、一流といわれる人物は、どんなに色々なことを考えて
 いたかがわかる。彼の代表作などと呼ばれているものが、彼の考えて
 いたどんなにたくさんさんの思想を犠牲にした結果、生まれたものである
 かが納得できる。単純に考えていたその作家の姿などは、この人にこ
 んなことがあつたのか、こんな思想があつたのかという驚きでめ
 ちゃめちゃになつてしまうであろう。その作家の性格とか、個性とか
 というものは、もはや表面のところに判然と見えるというようなもので
 はなく、いよいよ奥の方の深い小暗いところに、手探りで捜さねばな
 らぬもののように思われてくるだろう。僕は、理屈を述べるのではな
 く、経験を話すのだが、そうして手探りをしているうちに、作者にめ
 ぐり会うのであつて、だれかの紹介などによつて相手を知るのでは
 ない。こうして、小暗いところで、顔は定かにわからぬが、手はしつ
 かりと握つたというぐあいなわかり方をしてしまうと、その作家の
 傑作とか失敗作とかいうような区別も、別段たいした意味をもたなく
 なる、というより、ほんの片言隻句にも、その作家の人間全部が感じ
 られるというようになる。これが、「文は人なり」ということばの真
 意だ。それは、文は目の前にあり、人は奥の方にいるという意味だ。
 書物が書物には見えず、それを書いた人間に見えてくるのは、相当な
 時間と努力とを必要とする。人間から出てきて文学となつたものを、
 再びもとの人間に返すこと、読書の技術というものも、そこ以外には
 ない。もともと、出てくる時に、明らかな筋道を踏んできたわけでは
 ないのだから、もとに返す正確な方法があるわけではない。
 要するに読者は暗中摸索する。創つた人を求めようとして、創つた
 人の真似をするのだ。なるほど、作者という人間を知ろうとし

て、その作家に関する伝記その他の研究を読んだり、その時代の歴史
 を調べたり、というような色々な方法があるが、それは、碁・将棋で
 いえば、定石のようなものだ。定石というのは、勝負の正確を期す
 ために案出されたものには相違ないが、実際には勝負の不正確さ
 曖昧さを、いよいよ鋭い魅力あるものにするだけだ。人間は厳正な知
 力を傾けて、曖昧さのうちに遊ぶようにできている。

（小林秀雄『読書について』）



子供たちは、どこでも、英雄物語を与えられる。英雄たちを、いわば自らを映す鏡として子供たちは育つてゆく。誘惑に負けそうになつたとき、意気がくじけたとき、子供たちは英雄の業績を思い出し、歯を食いしばって頑張るのだ。少なくとも、発展途上国の友人たちの話を聞いてみると、国家的英雄こそが希望の星であり、それに向かつて人々が日々の努力を重ねている、という社会的事実がひしひしとよくわかる。

そうしたことを考えながら、日本の現実をながめてみると、私は一つの重大なことに気がつく。それは、現代の日本には、生き方のモデルになるような英雄があんまり見当たらない、ということだ。いや、そもそも、どう生きるか、についての教育があんまり行われていない、ということだ。

まず教科書の中に、英雄物語が少なくなった。皆無とは言わない。いくつもの感動的な物語はある。しかし、たとえば、一時代昔にわれわれの世代が学んだような愛国的英雄は、もはや今日の日本の教科書には見当たらない。偉大な政治家や科学者の伝記がいくつかあるけれど、それらの過半数は外国人である。日本の国家とかかわりあう英雄は、今日の子供たちの文化の中から姿を消してしまったようなのである。

課外の読みものでも、英雄の話はあんまり好まれていないようだ。児童図書の売り場には、たしかにキユーリー夫人、リンカーンなど内外さまざまな偉人の伝記がならんでいるけれども、必ずしもそれは人気のある書物ではない。子供たちは、マンガや探偵小説の方に手を伸ばす。伝記を買ってやっても、あんまり読む気にはなれないらしい。

これは、日本の現代文学史を考えるにあたって、きわめて重大なことであるように私には思える。少なくとも、私が子供のころには、たくさんさんの伝記があり、それらの伝記を私たちは、次から次へと読んだ覚えがある。もちろん、伝記というのは一般的に言って、子供にとつて小説ほど面白くもないし、またマンガほどわかりやすいものでもない。しかし、私たちの時代には、たとえば少年講談といったような、面白い文学形式があった。ややもすれば平板になり

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

がちな伝記を、子供向きの講談につくり換え、それを活字にした少年講談は、私たちの同世代人に、大げさに言えば、血湧き肉踊る経験を与えてくれたのである。豊臣秀吉、西郷隆盛、楠木正成……いろいろな歴史上の人物の生き方は、一連の少年講談によって与えられた。レオナルド・ダ・ビンチだのも、私はこうして本で学んだ。もちろん、いくつかの人物の選び方や、描き方は時代の産物であって、したがって、今日の基準から見ると、私が子供のころに読んだ伝記は不適切であつたり、あるいは間違っていたりしただろう。しかし、これまで歴史上に生きた人々の人生を学ぶことによって、自分の人生を考える、という行動の仕方が、昔の子供文化にはあつた。それが今は、かなりの程度まで失われてしまっている。

そのことが悪いことだ、というのではない。時代が変わつたのである。新しい時代の子供たちは、旧時代の人間とは違つた価値の中で、新しい生き方を発見してゆくのであろう。それは、それでよい。だが依然として、私は少なからず気がかりなのである。お手本になるような人生のモデルが貧困な時代に、はたして、子供たちはどんなふうにして人生の意味と方向を学んでゆくことができるのだろうか。

そのうえ、よしんば教科書的に、こう生きよう、という生き方のモデルが与えられたとしても、子供文化をとりまくマスコミは、あんまり崇高でない英雄たちを次々につくり、それをばらまき続けている。子供マンガの主人公は、不良グループのリーダーであつたり、あるいは暴力的な超人であつたりする。それらの主人公の生き方をモデルにして、子供たちが悪い方向に引きずられる、などと即断することは間違ひだけれども、現代の若い人たちにとつて、生きてゆく方向性は相対的に弱くなっている。少なくとも混乱している。若い人たちが、しばしば「生きがい」の喪失をうんぬんするのも、私の見るところでは、このへんのところと深く関係しているようだ。生きたいように生きる、という思い上がりで、他人の人生から学ぶことを怠つた世代は、結局のところ、人生の意味をつかむ手がかりを失つてしまったのである。

(加藤秀俊『独学のすすめ』)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

近ごろは、ロンドンにいる、あるいはイギリスにいる日本人はかえって英語を使わなくなつたのではないか。日本から同日に配達される日本経済新聞と朝日新聞を読み、衛星放送で日本のテレビを見る。そうすれば英語など使わなくていいのである。そういう考え方の人がふえているのではないだろうか。

こういう生活をして、本人たちはたいへん気楽なつもりでいるが、イギリスの側からいわせると、こういう日本人はイギリスに来ていたい何をしているんだろう、となる。お金儲け以外なにもしていないのではないか。イギリス人をわからうともしないし、イギリス社会について知ろうともしないじゃないかと。

こうして、イギリス人の胸の中にひそんでいる時間はしだいにふくらんでくることは間違いない。彼らはこんなふうにいるのだ。——日本人はイギリスに来て、したい放題のことをしている。お金は使つてくれるし、企業も進出してくれるかもしれないが、実際にやっていることはマナーもないし、イギリス人に敬意を払おうともしない。自分たちだけで好きなことをやって、ここがまるで自分たちの治外法権の場所みたいな顔をしている。いま若い日本人がますますそういう傾向になつていくとしたら、将来はかなり心配である。日英関係にかならず悪影響を及ぼすのではないか——。

いうまでもないことだが、イギリスにいる日本人のすべて、日本のビジネスマンのすべてがそうだということではない。特に企業人からも尊敬され、公の場所で意見もいうし、イギリス政府にたいしてアドバイスもする。

こうした日本の企業人とイギリス企業人との大きな違いは、日本の企業のトップは、ビジネスができるだけでなく、教養があるという点である。彼らは文学や芸術のことも話せるし、実際、そういうことに興味をもっている。イギリスのビジネスマンは、サッチャーさんの高等教育拡大方針にもかかわらず、お金儲けはできるし、マネジメントの才もあるが、じつは教養や文化にかかわりのない人が多いのである。お金が多かったらそれを持つて外国へ出ようとか、ホリデーをたつぷりとうとかいうことばかり考えていて、自分の教養を深めるということはないし、本を読むこともしない。

そういうビジネスマンが多いイギリスで、日本のトップクラスのビジネスマンは、詩の本を読んでいるとか芸術のこともわかるとか、とてもすばらしいと思われる。もちろんイギリスにもそう

いう人もいるが、マナーもすばらしいし、英語もきちんと話せる、いわば世界レベルの日本のビジネスマンがふえていることもまた確かなのである。

そうしたトップクラスのビジネスマンと、日本からやってきたとたんに、日本にはお金があつて、イギリスから習うものは何もないと、まるで植民地にでも来たように威張つてみせる若い人たちの差がひじょうに拡大してきているのではないか。

長いあいだイギリスにいて、日本企業の地位を高めるのに努力してきた日本のトップクラスのビジネスマンの苦勞は、日本が経済的に世界で大きな地位を占めるようになってから生まれた若い人たちの軽はずみな言動やバカげた行為によつて覆されてしまふのではないか——そんなことが危惧されるようになってきたのが当節のイギリスなのである。

(マークス寿子『大人の国イギリスと子どもの国日本』)



読解問題 7月4週分

問1 読解マラソン集1番「宿題がどっさりあるとき」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 比喻は、日本語に特徴的な表現手段である

B 西洋のレトリックは、議場などの議論の場で発達した

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「宿題がどっさりあるとき」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 古代の人は、腕力のない分を説得力でカバーするために弁論術を発達させた

B レトリックは、悪いことにも使うことができた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「花の多いところに」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 田んぼにレンゲを植えるのは、稲の肥料にするためだった

B レンゲは、もともと中国の植物だった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「花の多いところに」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A レンゲの花粉は虫が運ぶが、イネの花粉は風が運ぶ

B 古代の田園に咲くレンゲは、もっと白い地味な花だった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「私たちの体が」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 体の細胞は、異なる部位によって異なる遺伝子を持っている

B 人間の体には、細胞でできていない部分もある

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「私たちの体が」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 人間の皮膚は細胞だが、髪の毛や爪は細胞ではない

B 人間の体の皮膚の細胞には、皮膚の遺伝子が含まれているが、爪や毛の細胞の遺伝子は含まれていない

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「むかしぼくらは、」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 私は、学生のころ、動物園が好きだった

B 私の目当ては、動物園の王者といわれる山猫だった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「むかしぼくらは、」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 山猫は、動物園の生活に満足していなかった

B 山猫は、動物園の中では、あまり人気がなかった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 8月4週分

問1 読解マラソン集5番「——こうして話して」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 洋は、その日初めてプラネタリウムのある電気科学館に来た

B 洋次郎は、弟の洋が遅いので、怒り出した

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「——こうして話して」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 一番星を見つけた女の子は、洋の知らない子だった

B 洋は、プラネタリウムの作り出す「夜」にうっとりしていたが眠らなかった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「『私』は、複雑な家庭に」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 私は、ボールを自立させるために鍛えようとした

B 私は、自分の得意なウェイト・リフティングから教えようとした

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「『私』は、複雑な家庭に」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 私は、ボールが変われば、ボールの両親も変わると思った

B 私は、いずれボールに読書や美術鑑賞も教えられるかもしれないと思っていた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「私は一人で薪を」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 私は、遠い他国の小屋で、暖炉の火を見つめていた

B 私のあたっている暖炉は、小屋の中ではいちばん暖かいはずだった

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「私は一人で薪を」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 暖炉の火が弱いので、部屋の中は氷点下五度に下がっていた

B 私は昔、トナカイのソリに乗ったことがある

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「島崎藤村の事を」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 藤村は、人々からの遠慮のない批評を欲していた

B 藤村に叱られることを、人々はうすうす予期していた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「島崎藤村の事を」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 藤村は、洋行したときにも、たくさんの人に集まってもらった

B 藤村は、洋行や出版祝賀会は、告別式のようなものだと思っていた

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 9月4週分

問1 読解マラソン集9番「かつて私は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 音楽よりも絵画の方が種切れになる可能性が高いと言われている
B ジョルジオ・モランディは、浅はかな私の見方を変えるほど独創性にあふれていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「かつて私は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 人間にとって既知の部分が少ないときは、未知の部分もまた少ない
B 真に価値ある学問は、先人の模倣ではなく、個性的な独創によって生まれる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「ある作家の全集を」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 好きな作家の全集を隅から隅まで読むと、「文は人なり」ということがわかってくる
B 作者にめぐり合うことができると、傑作とか失敗作とかいうような区別はどうでもよくなる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「ある作家の全集を」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 読書の技術というものは、どのような本の中にも自分自身を発見するという技術である
B 読者が作家を求める方法は、その作家の真似をすることだ
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「子供たちは、どこでも」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 私が子供のころは、子供向けのおもしろい伝記がたくさんあった
B 人物の選び方や描き方が不適切であれば、伝記から学べるものは少なくなる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「子供たちは、どこでも」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 現代の子供たちは、人生の手本になるモデルを身近な人から得ている
B マスコミの描くモデルに頼らない生き方をすることで、生きる方向性は強くなる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「近ごろは、ロンドンにいる」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 最近イギリスに来る日本人は、英語が苦手な人が多くなっている
B イギリス人は、最近の若い日本人のマナーの悪さが日英関係に悪影響を及ぼすのではないかと心配している
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「近ごろは、ロンドンにいる」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A イギリスの企業のトップは、幅広い教養を持っている
B 日本のトップクラスのビジネスマンたちは、イギリスから習うものはもうないと思っている
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×